暗殺教室～もう一人のＥ組生徒～

蕾琉&昇華

椚ヶ丘中学、３年Ａ組に通っていた俺は毎日に退屈を送っていた。
しかしある日、一人のＥ組生徒を助けたことにより、退屈だった毎日が変わり始める。
ターゲットはマッハ20の超生物。
これは一人の少年とＥ組生徒達との絆の物語。

目次

3話 2話 1話

23 11 1

1話

どうも蕾琉&昇華の蕾琉です。
この作品は私が個人的に書きたかったので、書きました。
あまり上手くはありませんが、よろしくお願いします。

私立椚ヶ丘中学校、名門と名高い進学校。俺はそこの3年A組に通っている。
しかし、A組は俺にとって居心地の悪い場所にすぎなかった。A組の奴等とは話していても何も楽しくない。そのため俺にはクラスに友達なんていなかった。
いつもいつもつまらない授業を受け、休み時間に話す相手もいない、俺はそんな毎日に飽き飽きしていた。
今日もそんな1日が終わり、今は家に帰っているところだ。
「ああー、退屈だー」
俺はそんなことを思いながら歩いていた。

しばらく歩いていると、３人のＡ組生徒が１人の少女に絡んでいた。
３人のＡ組生徒は知っている。よくＥ組生徒達に絡んでいる奴等だ。
少女の方は見たことない。転入生だろうか、あいつらに絡まれているってことはＥ組か？…そういえばＥ組に、数日前に転入して早々、理事長室の物を壊してＥ組送りになった生徒がいるって聞いたが、この子だろうか。
まあどちらにしろ、自分達のことを強者だといい、人を見下すような輩は見ていてとても不愉快だ。
俺はそう思い、
「何してんの？お前ら。困ってるみたいだしやめてやれよ」
Ａ組生徒達に話しかける。
すると真ん中の生徒が、
「君は確か、同じクラスの紫音君だっけ？え、何、Ｅ組の生徒を助けるの？止めといた方がいいよ、こんな助ける価値の無いやつらを助けるなんて」
その一言で俺の我慢は限界となり、俺は拳に力を込める。
そして真ん中にいた生徒をおもいっきり殴り飛ばした。

「「えっ？」」

俺の一撃は顔面に当たり、真ん中の生徒は派手にふっとんだ。他の生徒二人は理解出来ないというような顔をしていた。普通に考えたらそうだろう。なんせA組生徒がA組生徒を殴ったのだ、しかもE組の生徒を助けるために。

しかしそんなの俺にとってどうでもよかった。人を助けるのにE組だろうが関係ない。

俺は他の生徒二人を睨み付ける。すると他の生徒二人は震え上がり、倒れているA組生徒を連れ、逃げていった。

A組の生徒達が見えなくなった後、

「大丈夫？あいつらに何かされてない？」

俺が少女に話しかけると、

「うん、大丈夫だよ。助けてくれてありがとう」

少女がお礼を言ってきた。

「そっか、それならよかった」

俺が安心していると、

「でも、私を助けるためにあんなことして大丈夫？」
少女が心配そうに聞いてくる。
「ああ、大丈夫、大丈夫」
俺は少女に笑って答える。
「そっか、よかったー！私茅野カエデ。よろしくね」
「ああ、俺の名前は緋月紫音だ。よろしく」
茅野の笑顔は明るく、俺が初めて見る笑顔だった。
「そうだ、またさっきみたいな奴等と会ったら困るだろうし、駅まで送るよ？」
「本当に！ありがとう」
それから俺は茅野と一緒に駅へ向かった。途中で色々と話をしなぎら帰ったのだが、茅野はとても話やすかった。A組の奴らとは違う、話していてとても楽しかった。こんな感覚中学になってから初めてだった。
そうこう話していると、駅についた。
「それじゃ、気をつけて」
「うん、本当にありがとね！」

俺は茅野を見送ると、家へと向かった。

「ただいま」

家につき、ただいまを言うが、誰もいない家に虚しく声が響く。

俺は靴を脱ぎリビングへ向かう。リビングにつくと簡易的な料理を作り、夕飯にした。その後、風呂に入り、ベッドに倒れこんだ。窓の外を見ると、今日も三日月が出ていた。

俺は目を閉じると、静かに眠りについた。

*

翌日

俺は朝から担任に呼び出された。職員室の扉を開けると、昨日俺が殴ったA組生徒と担任がいた。担任はとても不機嫌そうな顔をしていた。

「緋月、お前はバカなのか！E組生徒を助けるためにA組生徒を殴っただと！A

組生徒に何かあったら俺が責任をとらされるんだぞ！まったく、お前のせいで俺の評価に傷がついたらどうするつもりだ！もういい、お前は一週間停学後Ｅ組行きだ」

「はい、わかりました。…本当にすみませんでした」

俺はＡ組生徒と担任に頭を下げ、職員室を出ていった。

正直俺にとってＥ組行きだなんて、どうでもよかった。

「そういえば、Ｅ組といえば、確か茅野も…」

俺が教室に戻ると、皆の視線が一斉に俺に集まった。いつも以上に居心地が悪かった。

結局その日の学校は最悪だった。ひそひそ話―多分俺のことだろう―をしているようなやつらがいたり、わざと足を引っ掻けてくるようなやつだっていたし、俺を睨み付けてくるやつだっていた。

授業が終わると、俺は速攻で帰宅の準備を終わらせ、すぐさま教室を出た。周りのやつらにジロジロ見られるので、俺は急いで家へ帰った。

家につくと、俺はソファーに腰掛けた。やることもないので、テレビを見ていると、インターホンが鳴った。
「はーい、どちら様ですか？」
俺が扉を開けると、そこには黒いスーツを着た男性が立っていた。
「私は防衛省の烏間と言うものだ、君が緋月紫音君だな？」
「は、はい、そうですけど」
「実は君に少し話があってね、中に入らせて貰えないか？」
「え、あ、はい、ど、どうぞ」
リビングにつき、椅子に座ると、烏間さんが一枚の写真を取りだし、俺に見せてきた。
そこには黄色いタコのような生物が写っていた。
「えっと、この生物は？」
俺が問いかけると、烏間さんは
「単刀直入に言う、君にこの生物を殺してほしい」
え、嘘だろ。このタコみたいな生物を？俺が？

「こいつが、月を七割破壊した犯人、最高速度はマッハ20の超生物だ」
!?こいつが？このタコみたいな生物が月を？しかもマッハ20!?
「そして一年後、地球を破壊すると言っている。あの月のように」
烏間さんが窓の外を指差した。そこにはいつものように三日月が見えていた。
烏間さんはさらに話を進める。
「こいつは今、君が編入するE組の担任をやっている」
月を破壊した超生物がE組の担任!?
そして烏間さんは今までの説明でいろいろと驚いていた俺に、さらに驚くことを言ってきた。
「成功報酬は、１００億円だ」
「ひゃ、１００億!?」
今までそんな額見たことも聞いたこともなかった。
「他の生徒達はもう暗殺を始めている。君にも停学が明けしだい参加してもらう。これがやつに効く弾とナイフだ」
そう言って烏間さんは俺に銃弾とナイフを渡してきた。

俺はマッハ20の化け物なんて殺せるのか？と思った、しかし同時にこれは自分を変えれるチャンスなんじゃないかとも思った。そして俺は決心し、烏間さんに、
「わかりました、全力で頑張ってみます」
返事を返した。

こうして俺はE組で暗殺を行うことになった。
ターゲットはマッハ20の超生物。成功報酬は１００億。
今、俺の日常が一気に変わろうとしていた。

主人公の名前は緋月紫音です。
これからも頑張っていこうと思ってますので、最弱無敗もよろしくお願いします。
それでは、また

2話

今回、紫音が編入してきた後に野球の時間をくっ付けてみました。
なので、時間軸を少しずらしています。ご了承ください。

停学も明け、今日からE組での学校生活が始まるため、俺は今、旧校舎への道を歩いていた。
「うう、まだなのか」
旧校舎への道のりはなかなか距離があり、初めて通る俺にとってはかなりキツかった。
しばらく歩いていると本校舎とは違い、木でできた旧校舎が見えてきた。
俺は旧校舎の中に入ると、職員室へと向かった。
職員室につき、職員室の扉を開けるとそこには、
「初めまして。君が緋月君ですね。私がここ3年E組の担任殺せんせーです」

黄色い巨大なタコがいた。服からは無数の触手が出ていた。

「あ、ああ、よろしくお願いします」

さすがに驚いた。こんな生物今まで見たことがない。

「それでは教室へ行きましょう」

そう言って殺せんせーは教室に向かった。殺せんせーについていくと3―Eと書かれた教室についた。殺せんせーと共に教室に入ると皆の視線が教卓に集まる。

「おはようございます、皆さん。今日は編入生を紹介します。それでは緋月君どうぞ」

「あ、はい。緋月紫音です。これから1年間よろしくお願いします」

教室を見回すと、茅野と話したことはないが知っている顔が何人かいた。

「緋月君の席は奥田さんの後ろです」

言われた席に座ると授業が始まった。

実際殺せんせーの授業は分かりやすかった。とにかく殺せんせーは教えるのが上手い。本校舎の教師達とは比べ物にならないくらい。授業で退屈することは全くなかった。

休み時間になり、茅野が俺の席に来て、話し掛けてきた。
「この間はありがとう。紫音君。でも私を助けたせいでE組行きになっちゃったんでしょ。ごめんね」
「いや、別にいいよ。それに殺せんせー教えるの上手いし、今ではここに来てよかったと思ってるよ。あと名前でいいよ」
「本当に？よかった。これからもよろしくね紫音」
茅野が席に戻った後、水色の髪の男の子（？）が話し掛けてきた。
「緋月紫音君だっけ？僕は潮田渚。よろしく」
「お、おう。よろしく」
まさか自分から話し掛けてきてくれるなんて思ってなかった。
渚以外にもいろんな生徒が話し掛けてきてくれた。皆とても話しやすい人達ばかりだった。このクラスでなら楽しくやれそうな気がする、俺はそう思った。
そして翌日
国語の時間、杉野の元気がなかった。渚いわく殺せんせーの暗殺に失敗したらしい。そのわりには変だ。落ち込みすぎだと思う。

休み時間になり、
烏間さんが教室に入ってきた。
「どうだ、奴を殺す糸口はつかめそうか？」
「無理ですよ烏間さん」
「あいつ速すぎますって」
「弾もろくに当たりませんし」
「マッハ20で飛ぶ化け物なんて殺せるわけないッスよ」
確かに殺せんせーはあまりにも速すぎる。正直言うと速すぎて暗殺なんて不可能に近いくらいだ。
「確かにそうだ。だが考えてみろ、奴は君達の教師だけは欠かさない。これがどういうことか分かるか？」
つまり烏間さんは、俺達にはチャンスがあるということを言いたいのだろう。
考えてみればそうだ。殺せんせーが俺達の担任である限り必ず現れる場所、それがこの教室だ。つまりそれは、この教室は殺せんせーを殺せる唯一の場所だということだ。

ただ、俺には一つ分からないことがあった。それは、あの超生物がなぜＥ組の担任をやっているのか、それが分からなかった。

翌日

昼休み

「どこいくの？渚」

偶然渚を見かけたので話し掛けた。

「あ、紫音。実は殺せんせーに課題を提出しようと思って。あと、杉野と何か話してたから気になって」

なるほど。確かにそれは気になる。

結局俺も渚と一緒に殺せんせーの所へ行くことにした。

「殺せんせー何話てんだろう？」

「うーん、もしかしたら昨日の暗殺を根に持ってからんでるんじゃ…」

「あー、確かにありえるかも」

殺せんせーが何をしてるのか気になり、殺せんせーと杉野がいる方を見てみるとそこでは、

「「思ってたよりからまれてる!!」」

杉野がからまれていた。殺せんせーの触手に。

「何してんだ、殺せんせー!!生徒に危害を加えないって契約だっただろ!?」

俺が殺せんせーに問いただすと、殺せんせーは口を開いた。

「杉野君、昨日の投球フォーム、メジャーに行った有田投手のマネですね」

「…!!」

杉野の顔が驚いたような顔になった。どうやら図星だったらしい。

「でもね、触手は正直です」

「?」

触手が正直?どういうことだろうか。

「彼と比べて君は肩の筋肉の配列が悪い。ですから、マネをしても彼のような豪速球はなげれませんねぇ」

「なんで先生にそんな断言できるんですか?」

俺が殺せんせーに問いかけると、殺せんせーは一枚の新聞を俺たちに見せてきた。

「きのう本人に確かめて来ましたから」

そこに載っていたのは触手責めされている有田投手だった。
(((確かめたんならしょうがない!!)))
その状態でサインを頼んだらしく、サイン色紙にはふざけんな触手ニ三と書いてあった。
(まあ、普通そうなるよな)
「…そっか、結局才能だよなぁ…「一方で」」
杉野が諦めかけていたその時、殺せんせーが口をはさんだ。
「肘や手首の柔らかさは君の方が素晴らしい。鍛えれば彼を大きく上回るでしょう」
驚いた。触手でいじくることで、そんなことが分かるなんて。
「いじくり比べた先生の触手に間違いはありません」
そして杉野に向かって、
「才能の種類は一つではありません。君には君の才能がある。君の才能に合った暗殺を探してみてください」
そう言って去っていった。
「殺せんせー」

殺せんせーがこちらを振り向くと、俺は殺せんせーに問いかけた。
「まさか… 先生がニューヨークに行った理由って、杉野に助言(アドバイス)をあげるため？」
「もちろん、先生ですから」
「普通の先生はそこまでしてくれないぜ、どうしてそこまでするんですか？」
「……」
殺せんせーは少し考えた後、俺と渚に、
「紫音君、渚君、先生はね、ある人との約束をまもるために君達の先生になりました」
そして渚からノートを受け取り、ものすごいスピードで採点しながら話を続ける。
「私は地球を滅ぼす超生物です。ですが、その前に君達の先生でもあります。君達と真剣に向き合う事は、私にとって地球の終わりよりも重要なのです」
そう言って殺せんせーは渚にノートを返した。
「… 殺せんせー」
返されたノートを見て、渚が口を開いた。
「前から思ってたせど、ノートの裏に変な問題書き足すのはやめてくんない？」

「にゅやッ、ボーナス感があっていいじゃないですか！」
「いや、殺せんせー、むしろペナルティだから。俺のノートにもそういうの書いてたよね？」
地球を破壊する超生物なのに、殺せんせーはこういうところが面白い。
「そんなわけで、君達も生徒と暗殺、両方を真剣に楽しんでください」
そう言うと、殺せんせーはボールペンをかみ砕き、
「ま… 暗殺の方は無理だと思いますがねぇ」
そんなことを言ってきた。

バァン
「うわっ」
俺と渚は今、杉野とキャッチボールをしているのだが、杉野がとんでもない球を投げてきたのでビックリしていた。
「すげーな、杉野。なんなんだ今の球は？」
「へッへ～。あいつのアドバイス通り、肘と手首をフルに活かした変化球だぜ!!遅

い速球（ストレート）もこいつと二択で速く見せれる」

あれから杉野は殺せんせーのアドバイス通り頑張ったみたいだ。その結果がさっきの球というわけか。

「ま、あいつにとっちゃアクビが出るよな球だろうな。でもさ、紫音、渚、俺続けるよ野球も暗殺も」

「ああ」

「うん」

俺達は暗殺者。ターゲットはマッハ20の超生物であり、俺達の担任でもある殺せんせー。

殺せんせーの暗殺教室はまだ始まったばかり。

どうも蕾琉&昇華の蕾琉です。

今回、編入してきたとこで暗殺仕掛ければ？と昇華に言われたのですが、私はあまり、カルマみたいな感じにはしたくなかったので野球の時間をくっ付けました。

これからも頑張っていくのでよろしくお願いします。
それでは

3話

ある日の放課後。

シャリシャリシャリシャリ

今殺せんせーはおやつのかき氷を作っているところだった。茂みの中には数人の生徒達の影。俺はその様子をどうなるかと思いながら見ていた。

「いたいた」

「今日のおやつは北極の氷でかき氷だってよ」

「コンビニ気分で北極行ってんじゃねえよあのタコ」

数人の生徒達はおやつタイムの殺せんせーを茂みより観察し、攻撃の機会を伺っているようだった。

「行くか」

「百億は皆で山分けだ!!」

一人の生徒の合図により、茂みに隠れていた生徒達がいっせいに殺せんせーのもとへと向う。

「先生ー」

「俺達にもかき氷作ってくれよー」

生徒達の顔は笑顔だった。おそらく殺せんせーを油断させるためだろう。しかしそれで殺せるだろうか？…おそらく殺せない。そんな作戦であの先生を殺せるなら誰も苦労しないだろう。

結局生徒達の作戦は失敗に終わった。あの後、殺せんせーに近づきナイフを取り出せたのはいいものの、生徒達のナイフは一瞬にして花にすり替えられてしまった。やっぱりあんなわざとらしい笑顔じゃあの先生を騙すことなんてできないらしい。

しかし同時に殺せんせーは一つミスを犯してしまった。

それは、殺せんせーがナイフとすり替えるために取った花が生徒達の花壇に咲いていた花だったということだ。そのため殺せんせーは今、女子二人にいろいろ言われながら球根を一つ一つ丁寧に花壇に植えていた。とても地球を爆破する超生物とは思えない光景だった。俺はその光景に苦笑しながら、渚を見つけたので渚のところへ向かった。

「よう、渚。何してんだ？」
「あ、紫音。先生の弱点をメモってるんだよ」
「へー、先生の弱点かー。例えばどんなの？」
俺が渚にメモを見せてもらおうとすると、茅野が近づいてきた。
「何してんの？二人とも」
「ん、ああ茅野。実は渚が殺せんせーの弱点メモっててさ、見せてもらおうとしてたとこなんだ」
「…ふぅん」
そう言って茅野もメモをのぞいてくる。
「…でもその弱点、暗殺に役立つの？」
「た、確かに」
そこにはカッコつけるとボロが出ると書いてあった。

しばらく茅野と渚と話していると、球根を植える作業が終わったらしく殺せんせーが姿を現した。

「皆さん、先程は花壇を荒らしてしまい本当にすみませんでした。そこで先生考えました。お詫びといってはなんですが、君たちにチャンスをあげましょう」

そう言って殺せんせーはどこからかロープを取り出し、それを使って自分の体を木に吊るし始めた。

「な、何してんの？先生」

俺はその先生の行動を疑問に思い、問いかけた。今の殺せんせーの状態は自分の体を木に吊るした状態である。その状態でもし撃たれでもしたら避けれるわけがない。

「ヌルフフフ、言ったでしょう？君たちにチャンスをあげると。さあ皆さん、どうぞ遠慮なく撃って下さい。こんなに身動きがとれない先生はめったにいませんよぉ」

「いや、そんな状態だったらいくら先生でも避けるのは無理だろ」

「それはどうでしょうかね～。紫音君、試しに先生を撃ってみて下さい」

「は、はい。わかりました」

俺は先生に言われた通りハンドガンの銃口を先生に向け、引き金を引いた。

パン
ぬるん
『!?』
その場にいた全員が驚いたであろう。
殺せんせーは体を木に吊るしたまま、華麗に俺の弾を避けた。
「ま、まじかよ」
「ヌルフフフ、油断しましたね～。先生にとってこの状態で君たちの攻撃を避けるなんて容易いことですよ、紫音君」
殺せんせーは顔にしましまの模様を浮かべ、俺にそう言ってくる。くそ～、ムカつく。
「さあ皆さん、どんどん撃ってきて下さい。そして私に一発でも当ててみなさい！」
こうして俺達E組ではハンディキャップ暗殺大会が開催された。

パンパンパンシャッシャッシャッ

俺達は現在、殺せんせーにより開催されたハンディキャップ暗殺大会にて木に吊るされた殺せんせーを攻撃しているのだが、俺達の攻撃は全て完全に避けられていた。

銃だけでなく、ナイフも使っているのだがそれすらも完全に避けられている。

「どう紫音？」

皆が殺せんせーを攻撃しているとこを眺めていると、茅野が話しかけてきた。

「うん…全然当てれない。ていうかあの状態でよく避けれるな、あの先生」

（でも待てよ。渚のメモでは確か…）

「ヌルフフフ、甘いですね～E組諸君。そんなんじゃ先生を殺すなんて夢のまた…」

バキッ

「あっ」

殺せんせーが動きすぎたせいで木に負担がかかってしまったらしく音をたてて折れた。

ボトッ

『……』
生徒と殺せんせーの間に沈黙がおとずれた。
そして、
『今がチャンスだ！殺れーッ!!』
生徒達は一斉に殺せんせーに斬りかかった。
「にゅやーッ!!」
殺せんせーはカッコつけた結果、渚のメモ通りボロがでてしまった。
これから、渚のメモは役に立ちそうだ。
「ちょま…ちょっと待って！縄と触手が絡まって」
殺せんせーは触手絡まった縄をほどきながら皆の攻撃を回避し続けていた。
（にしてもテンパるの早いな〜、殺せんせー）
そして数秒後、
ドシュッ
「あ、抜け出した」
殺せんせーはようやく縄をほどき、校舎の屋根の上へと逃走した。

そして一言、

「明日出す宿題を2倍にします」

『小せえ……』

もとはといえば殺せんせーの自業自得である。それなのにあれだけで宿題2倍って、どんだけ器が小さいんだよと思えてくる。

俺達に一言言った後、殺せんせーはとんでもない速さでどこかへ行ってしまった。

(あの先生を卒業までに殺す…か。)

そう思い、殺せんせーの飛んでいった先を見つめていると茅野が、

「紫音」

「なんだ?茅野」

「どう?殺せんせーは。殺せる?」

そんなことを聞いてきた。

そんなの答えはとっくに決まっている。

「殺すさ、絶対に」

暗殺教室～もう一人のＥ組生徒～

著者　蕾琉&昇華

発行日　2019 年 5 月 9 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/181024/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。